

## ひじりの声 上田藤市郎

科学技術の進展によって多くの人々が様々な情報を容易に入手できることとなった。しかし、その情報の真偽や価値は示されていないので、情報を見聞きする私達が自分で判断し、対応しなければならぬ。また、自分が誤った判断に至った結果の責任を、その情報源に求めるのは、いかなるものでもあろうか。藤樹書院に掲示されている「藤樹規」の『己の欲せざる所、人に施すことなかれ。行いて得ざることあらば、これを己に求めよ。』に思い当たる。

国内、国外を問わず、世界を駆けぐる情報に惑わされずに、落ち着いて静かに自分の気持ちで本当のを見つめる姿勢を大切にしたい。現代の政治家は、自国の利益を第一にする。他国の国民や難民に苦痛や負担を強いることがあつたとしても、自国の利益を優先すれば、国民の支持を得られると考えているようだ。藤樹先生が、掲げた「藤樹規」の精神からは程遠い志である。人類の共存は国際社会の基盤であり、互助の精神は必然的に自己抑制を必要とする。他国を侵略して自己増殖する結果が、第二次世界大戦を招いたのだ。国家の横暴に比して、民意の力はちっつけなものだ。しかし、正義は朽ちてはならないのである。

## 「藤樹紙芝居」の紹介⑭

### 『うそはつけぬ』

(解説)

中江藤樹先生は愛媛県大洲での時代に、十九歳という異例の若さで藩内の一部を任せられ、郡奉行(年貢・現在の税金の徴収や地域の訴訟に関する役職)となりました。藤樹先生は、弱い立場の農民たちに、いつも思いやりをもって接していました。

当時の米作りは、自然任せで大雨や干ばつですぐに被害が出て、季節によっては米の収穫量にも大きく影響する時代でした。米の増減収は、年貢米として直接藩の財政を左右するだけに、常に米の生育状況に気遣っていたことでしょう。

しかし、農民たちが、常日頃からお米を主食にすることはまれで、「ヒエやアワ、芋類」等がほとんどであったと思われまふ。そのような時代を背景に、まっすぐな心で、いつも農民の暮らしと田畑のことにも心配りをしてくれる郡奉行の与右衛門さんには、農民の心も穏やかになり、うそをついてまで年貢の減額を言えなかつたと伝えられています。

この紙芝居では、与右衛門さんと農民とのやりとりを通して、人の真心に触れる、温かみのあるお話になりました。

子どもたちに、やさしい心を持ち

続けることの大切さが伝わればと願っています。

### (紙芝居)

① ここは、中江与右衛門さんが十九歳の若さで郡奉行という役職についた、大洲(愛媛県)のご城下です。周りには青々とした田んぼが広がっています。今年も、お米の苗も元気よく育ち、気持ちよい風に揺れています。そんな田んぼを見ながら、太吉さんが言いました。

太吉「うちの田んぼは、お米の苗もよく育ち、たくさんとれそうだ。壮助さんの田んぼはどうだ。」

壮助「うちの田んぼもよくできているぞ。秋が楽しみだ。これからも家族みんなでがんばって世話をするぞ。」

農民たちは、顔を合わせるとそんな話をして喜んでいきます。



② ところが、秋が近づいて稲穂が出てくる頃から、毎日のように大雨が降り続きました。



郡奉行の与右衛門さんは、農民たちの田んぼや畑が心配になりました。雨の降る中を、『稲や野菜が水につかっているかもしれない』

と、田畑の様子を見て回りました。与右衛門「これはいへんだぞ。早く雨が止まないで、年貢(税)のお米も、農民が食べる物もとれなくなるぞ。」

と、心配になってきました。

③ 半分抜く、嘉助さんの田んぼは、低いところにあります。そのため稲が水にとっぷりとつかっています。

嘉助「今までせっかく一生懸命田んぼの世話をしてきたのに、このままではお米がとれなくなるぞ。ああー、どうしよう。」